

インドに於ける俳句の享受

イムラン モハンマド
Imran MOHAMMAD

日本とインドの関係には古い歴史があるが、それは仏教や、哲学、シルクロードを経て日本へ伝来した舶来品などが中心であり、ほとんど一方的な流れであった。インドにおける日本研究の歴史は非常に浅く、せいぜい一世紀ぐらいの実績しかない。インドが日本と接触したのは、近代を迎えたばかりの、十九世紀の終わり頃であった。その時、哲学者であるヴィヴェークアナンダ（1863年～1902年）、マイソール藩王国の代表者、ハイデラバード藩王国の学者たちが初めて日本を訪れたが、当時イギリスの支配下になっていたインドは、日印関係の花を咲かせることは出来なかった^①。

二十世紀に入り、再びインドと日本の交流が始まると、インドの詩人であるタゴールが来日し、日本を代表する思想家や、詩人、作家達と交流し、講演を開いたり、積極的に意見を交わしたりした。この訪問をきっかけに、日本でインドが話題となったことで、日印関係が進み、インドにおける日本文学研究の第一歩を築いたのである。

本発表では、インドに俳句を導入するのに有意義な役割を果たした三人、つまりタゴール、アッギューエ、ワルマ教授の俳句享受を中心に述べて行きたいと思う。

なお、本発表の目的は次の二点である。

- ・インドの詩人たちによる俳句享受の歴史の変遷を辿る。
- ・インドにおける俳句研究史を明らかにする。

それでは、本論に入りたいと思う。

タゴールの俳句と出会い

1913年（大正2年）、タゴールはアジアで最初のノーベル文学賞を受賞した。ラビンドラナート・タゴールの名声はインドを超えて、アジア各国を通して日本にまで伝わり、1916年5月にタゴールは日本へ旅立つことになった。来日に際して、タゴールは旅行記『ジャパン・ジャトリ（原文：जापान .यात्री、訳：日本への旅人）^②』を執筆し、以下の二つの俳句をベンガル語に訳して載せた。

1. 〈ベンガル語〉 पुरोनो पुकुर ब्यांगेर लाफ जलेर शब्द
 〈読み〉 プロノプクル ベンゲルラーフ ジャレール・シャボド
2. 〈ベンガル語〉 पचा डाल एकटा काक शरतकाल
 〈読み〉 ポチャダール エクタカーク シャロトカール

『ジャパン・ジャトリ』に掲載されたのは、芭蕉の有名な俳句の英語訳を、ベンガル語に逐語訳したものであり、原文は次の二句である。

1. 古池や 蛙飛び込む 水の音
2. 枯れ枝に 烏のとまりけり 秋の暮れ

『ジャパン・ジャトリ』は全部で119ページあり、内容は15節に分かれている。冒頭から第11節までは、タゴールが船でピナン、ヤンゴン、シンガポール、香港など各地を通して、日本の神戸に到着するまでの出来事や思索が、第12節から第15節には、日本での体験が綴られている。すなわち、71ページから119ページにかけて、神戸の港に着くところから、日本で見聞した伝統、文化、文学、風景、日本人の性格などが中心に執筆されており、俳句については、第13節の82から85ページまでにまとめて述べられている。

より詳しく見てみると、タゴールは旅の途中で体験したこと、そこから展開される自らの哲学的な考察を『ジャパン・ジャトリ』に記している。旅には土佐丸という船が使われたが、東インドのコルカタという町の港から船出した時点の、船中の体験から日本を味わうことが始まったと述べている。例えば日本

人の船長には独特の風格があり、それはつまり一見非常に善良で親しげに見えても、彼は極めて規律的な人物であったということなどである。そして、日本の文化の一つである茶道を体験したタゴールは、客の前に出す茶の儀式はあまりに美しく、日本人の美意識は一つの修行に相当すると語っている。けれども、日本人は神秘的で、苦難の時にも興奮した時にも自己を抑制するので、その精神性は外見からは理解しがたい。そうした、自己表現を極力簡素化する日本人の習性は、日本の詩にも見いだされると感じている。

タゴールが訳した二つの俳句は、「五・七・五」という限られた文字数の句形を再現する努力が見られる。そして最適な言葉を選びながら句の意味を伝え、しかも読者が想像によって情景を補う余地を残している。

更に、タゴールが訳した句や解説を読むと、タゴールが日本の俳句の季語や切れ字などの俳句の約束事の習得よりは、俳句から伝えられて来る意味や俳句の見た目、つまり文字数などに注目したことがわかる。タゴールは『ジャパン・ジャトリ』で、俳句という極端な短詩型の韻文から学び取った日本人の美的感性の特性を、次のように述べる。それは、日本人は彼らが抱く豊かな美的感情と心理的情感をそのまま発揮することはせず、感覚的な表現を抑制することで、むしろ読者に鮮烈な印象を残すという方法を取る、ということである。この抑制は、日本人の魂の節制であり、日本の大きな特徴であるとタゴールは考える。

このように、日本の「俳句」は、タゴールによって初めてインドに紹介されたが、タゴールが執筆した『ジャパン・ジャトリ』はベンガル語で書かれており、ベンガル語はインド二十八州のうちの二州、つまり西ベンガル州やトリプラ州の公用語であるが、インドの言語人口から見れば多数派ではなく読者数は多いものではなかった。

更に、本作は複数の言語に翻訳されても、俳句からの更なる訳文であったため、インドの人々が俳句の本来の姿を知ることはできなかった。

アッギューエと俳句の関わり

1919年にタゴールによって紹介された俳句や日本文学の研究が本格的に始まったのは、1957年に日印文化協定が結ばれてからであった。同年の夏、インドの詩人であるアッギューエが初めて来日した。アッギューエは日本文学に影響を受け、日本の俳句をヒンディー語に訳すと同時に、俳句から受けた印象を自身の詩に反映した。

アッギューエは日本の美しい自然を歩き、新しい体験をして、日本の詩に用いられている言葉の奥深さに心を動かされた。とりわけ、「五・七・五」の音節を組み合わせて作る、世界で最も短い詩の一つである俳句に魅了された。彼は盆栽が自然の形を模して造られるように、俳句も言葉を短く凝縮して、人間の精神を込めたものであると考えた。

一方、アッギューエは来日する前に、ある詩をどうしても完成させることができず、未完成の状態で放置していた。しかし、日本から帰国して改めてその詩を見ると、それに新しい言葉を付け加えることは不要であり、既に詩として完成していることに初めて気付くことができた。

アッギューエが苦しんだその詩は「スズメの詩」といい、次のようなものである。

〈ヒンディー語〉 उड़ गई चिड़िया काँपी फिर थिर हो गयी पत्ती^③

〈読み〉 ウル・ガイ・チリヤ カーンピ・フィル テイル ホ・ガー
イ・パッティ

〈逐語訳〉 スズメは飛び、 振動した、 又止んだ 葉っぱ

〈意識〉 雀飛び 揺れる枝葉の また止まる

アッギューエは「俳句」という方式を知ることによって長年の停滞を解消し、詩を新しい境地にまで引き上げたのである。そしてこれ以後、アッギューエは次第に俳句へと近付いていった。

1959年、詩集『アリ・オ・カルナ・パルバーメー』を出版するが、この詩集では俳句をヒンディー語に訳すと同時に、自らもヒンディー語で俳句のよう

な短い詩を書くことを試みている。更に、日本を題材にした詩も見られる。

本書には全部で二十八句の俳句がヒンディー語に訳されており、句の後には作者も付記されている。

なお、アッギューエは日本語を読むことができず、俳句については英語訳の本を読み、日本人の友人の訳にも助けられていたことを、『アリ・オ・カルナ・パルバーメー』の序文でも明らかにしている。

アッギューエが翻訳した俳句は、当時のインドでは一見して他の言語を訳した詩であるとは分からず、アッギューエ自身が新しい試みとして作った詩だとインド人から思われるほどの出来映えであった。アッギューエの翻訳に対して、インド人が違和感を持たなかったのには、二つの理由が考えられる。一つは、俳句と同じく三行で訳された詩にはリズムがあり、詩の内容に相応しい言葉を吟味したことで、行同士が密接に関連付けられ、一個の詩としての完成度が高まっていることである。もう一つは、詩の雰囲気伝えるため、必ずしも行に従って逐語訳せず、ヒンディー語の読者にも分かりやすい言葉で訳していることである。

したがって、日本の「俳句」について、定まった技法である「季語」や「切れ字」などが正しく理解されたとはいえないが、それがわずかな言葉に豊かな詩情が溢れる、インドにおいては新しいジャンルの詩であることは伝わったことだろう。アッギューエには日本人の友人がいたので、本人は俳句の細かな表現の解説も直接受けていた可能性は高いが、その具体的な詳細については文献から読みとることはできなかった。

ところで、アッギューエが読んでいた俳句の英語訳には、どのようなものがあったのだろうか。当時、英語に訳された俳句の本の出版状況を探ったところ、次のようなものを見つけることができた。

- ・ A. Miyamori “An Anthology of Haiku Ancient and Modern” The chugai Printing Co.Ltd, 1932
- ・ Harold G. Henderson “The Bamboo Broom, An introduction to haiku-

From Basho to shiki” Houghton Mifflin, Boston USA, 1934

- ・ Kenneth Yasuda “A pepper Pod” Alfred A. Knopf, Inc, New York 1947
- ・ R. H. Blyth “Eastern Culture” Volume-1 Kamakura Bunko Tokyo 1949
- ・ R. H. Blyth “Spring” Volume-2 Kamakura Bunko Tokyo 1950
- ・ R. H. Blyth “Summer to Autumn” Volume-3 Kamakura Bunko Tokyo 1952
- ・ R. H. Blyth “Autumn to Winter” Volume-4 Kamakura Bunko Tokyo 1952
- ・ Kenneth Yasuda “The Japanese Haiku” Charles E. Tuttle Co. Inc Rutland, Vermont 1957

上記の中で、アッギエーエが扱った俳句は、1932年に出版された宮森氏の“An Anthology of Haiku Ancient and Modern”と一致するものが多い。

更に、宮森氏の本は、日本語で俳句および俳人名が書かれ、ローマ字で読み方を並記した上で、英語訳を載せるが、俳句の解説まで行っているのは宮森氏だけである。

当時、俳句を英語訳した本は数が少ないことから、アッギエーエが入手したのは宮森氏が翻訳した本ではないかと推測したい。その判断理由は三つある。一つは、宮森氏の本が芭蕉以前から子規以後まで、時代を広く取り扱っていること、二つは、英語訳だけでなく解説も入っていること、三つは、『アリ・オ・カルナ・パルバーメー』に掲載されている俳句が、宮森氏の本と一致するものが多いことからである。

アッギエーエの俳句理解

アッギエーエの俳句理解について、インドのネール大学教授の日本文学研究者であるワルマ氏は、第三十三回日文研フォーラムで発表した講演「インドに於ける俳句」で、次のように語っている。

東京外国語大学のヒンディー語文学の田中敏雄教授は「アッギエーエは俳句の外国語の翻訳に一番成功した翻訳者である。」と言っています。アッギエーエは日本語がわかりません。しかし日本人の友達の助けを借りて翻訳された詩の深

いところまで理解しようとした。ときには、勝手な翻訳も加えますが、美しい詩に翻訳することに成功しました^④。

更に、ワルマ教授は1977年に出版した『ジャパニ・カヴィターエ、जापानी कवितायें、日本の韻文集』でアッギューエが翻訳した俳句について次のように述べている。

「アッギューエは原文の本質を明確に表現しようとし、インドのことわざやインドのコンテクストに当てはまる単語を選択して詩情を的確に表現することができた。」

(『ジャパニ・カヴィターエ』 ページ 36～37)

アッギューエは、俳句を取り入れる際に詩としての表現を重視した。それは、ヒンディー語としての新しい詩のように読みうるものであったため、読者は詩の下に書かれていた参考文献を見ない限り、アッギューエの創り出した新しいジャンルの詩作のように受容した。

アッギューエが俳句を翻訳してインドで出版した文献は、前述の『アリ・オ・カルナ・パルバーメー』が一冊あるのみである。瞥見の限りでは、他の文献は存在しないため、アッギューエの俳句理解を明らかにするために本書は重要な一冊となる。これによると、アッギューエは芭蕉の句に最も惹かれていたことは明らかである。『アリ・オ・カルナ・パルバーメー』で訳された28句のうち、芭蕉の句は最も多い8句が入れられている。

アッギューエが訳した俳句は、次のようなポイントで解説することが出来る。

- 一、詩の内容に相応しい言葉を逐語訳せず、インド社会に当てはまる言葉を選んだこと。
- 二、詩の韻律を遵守したこと。
- 三、三行であることに拘らず、内容によっては四行でも訳したこと。
- 四、行同士を密接に関連付けていること。
- 五、俳句のニュアンスを伝えることを重視して、三行の順番を並べ替えることもしたこと。

上記の項目を詳細に語ると次のようになる。

一、アッギューエは詩の内容を逐語訳せず、インドのコンテキストで当てはまる言葉を選んだ。このポイントはワルマ教授も『ジャパニ・カヴィターエ』の36ページで説明したことで、それについては上記に引用した通りである。少年時代から言葉の力を理解していたアッギューエは、俳句の翻訳に当たっても自分が訳した詩に最適な言葉を選んだことで、インドの読者に自国の詩であるかのような親しみを感じさせるものとなった。

そうしたアッギューエの言葉遣いの例を、彼自身が訳した芭蕉の有名な句で確認したい。その句は次のようである。

〈俳句〉 古池や 蛙飛び込む 水の音

〈ヒンディー語〉 ताल पुराना क्दा दादरः गुडुप

〈読み〉 タル・プラナ クダーダードル グルップ

〈逐語訳〉 古い池に 蛙飛び込んだ グルップ（擬音語）

インドでもよく流行したこの句は、アッギューエの詩人としての感性で訳したものである。上記の句の最後の単語「水の音」はヒンディー語で「गुडुप、グルップ」となっている。この単語は「水の音」の逐語訳ではなく、水から出る音の擬音語である。もし、ヒンディー語で「水の音」をそのままの言葉で表現したら、読者の想像力を言葉の強さで響かせることは出来ないだろう。けれども、擬音語の言葉が使われたからこそインド人の読者に詩的なクライマックスを感じさせることが出来たのである。

二、インドの韻文界ではリズムは大事な役割を果たす。古代からヴェーダなどが歌の形式で読まれ、聞き手や読み手に心地よく聞こえるようにするために韻律的に書かれた。その従来形式が現在に至っても詠み続けられている。歌が中心のインド社会では韻文にもいくつかのジャンルがあるが、どの詩にあってもリズムは欠かせないものである。そうした文化圏のなかで生きたアッギューエは俳句を訳した時、俳句の終わりをリズムを感じさせる言葉遣いで仕上げている。

三、アッギューエは俳句を翻訳するに当たり、大抵の場合は三行で訳すことを基本としているが、場合によっては二行や四行になっていることもある。

ここで嵐雪の句とアッギューエがヒンディー語で四行で訳したものを紹介すると同時に、1932年に出版された宮森氏の“An Anthology of Haiku Ancient and Modern”^⑤270 ページで載せられている本句の三行となっている英語訳も引用したい。

〈俳句〉 来る水の 行く水洗う 涼み哉

〈ヒンディー語〉 तोते पानी के सोते में नहाने का सुखः

जाते पानी को धोता है आता पानी

〈読〉 トテ・パーニ・ケ・ソテ・メ ナハネ・カ・スークジャータ・

パーニ・コ・ドータ・ヘ アータ・パーニ

〈逐語訳〉 涼み水の流れに 水浴の喜び 行く水を洗う 来る水

〈英語〉 I enjoy the cool The coming water washes the departed water

アッギューエは俳句の理解に、日本人の友人からの助言を得ていたというが、上記のヒンディー語訳を分析すると、ここでもアッギューエは友人の解説に頼ったように見える。日本語の知識がないアッギューエにとって本句の感覚をそのまま理解して、またヒンディー語で表現するのに三行は不足であった。これは、原語の知識がない時や大量の解説が逆に混乱を引き起こす場合には、表現が難しくなるためであると思われる。

四、アッギューエは訳した俳句の行同士を密接に関連付けた。一般的な翻訳ではそれぞれの単語を逐語訳するばかりで、行と行の間の関連を表現しきることとはできない。結果として、そうした翻訳では、原語の詩の持つ情景を再現することは出来ない。しかし、アッギューエは彼自身の詩的な感性で行と行の関連を意識することで、豊かなビジョンを表現することに成功している。

その結果、俳句はインド人に広く受け入れられることとなったのである。この功績について、アッギューエは『アリ・オ・カルナ・パルバーメー』の序文

でも取り上げている。

五、アッギューエは俳句の三行をそのままの語順で訳さず、行の順番を変えてインド人の読者に近く感じられるニュアンスで伝えようとした例もある。この点については、アッギューエが訳した芭蕉の句の例を取り上げたい。

その句の訳は次の通りである。

〈俳句〉 やがて死ぬ 景色は見えず 蟬の声

アッギューエが訳したヒンディー語は下記のようなものである。

〈ヒンディー語〉 झिल्ली का अविरत उल्लास देता है संकेत कहीं क्या उसे
मृत्यु है कितनी पास

〈読み〉 ジッリ・カ・アヴィラット・ウッラス

デター・ヘ・サンケート・カヒ・キャ・

ウセ・ミリティユ・ヘ・キトニ・パース

〈逐語訳〉 蟬が歓喜の中に鳴き続ける どこにも示さない 死が近いこと

上記の句の訳は三行となっているが、原語の一番目の行はヒンディー語で三番目になり、俳句の三番目の行は訳されたヒンディー語では一番目になっている。

アッギューエは順番を変えることで、詩をインド風に伝えようとしている。ヒンディー語訳で最初の行になっている「蟬の声」は、詩の始まりとして読者に話題の導入を提示するものである。更に、ヒンディー語の訳で二行目になっている「景色は見えず」で詩の背景を作り、訳で最後の行になっている「やがて死ぬ」で詩のクライマックスを描写している。

このようにアッギューエが行を変える主な理由は、詩の本質をそのままインド人の読者に伝えるためであり、原語の行通りにヒンディー語で訳していたら、読者に詩的な感覚を伝えることは難しかったと私には思われる。

続いて、アッギューエは日本から帰国した後に出版した『アリ・オ・カルナ・パルバーメー』に『जन्म-दिवस, ज्ञानम・ディवास, 誕生日』という題

で次の詩を詠んでいる。

〈ヒンディー語〉 एक दिन और दिनों सा आयु का एक बरस ले चला गया^⑥

〈読み〉 エク・ディン アウル・ディノ・サ アユ・カ・エク・

バラス・レ・チャラ・ゲヤ

〈訳〉 今日は 普段のようだが 一年が消えた。

アッギューエの上記の詩は、俳句的であり、インドの韻文界であり見られないものである。形式的に見ると、三つの文で成る詩はヒンディー語の「4-6-13」文字で成り立っている。俳句に形式的に接近する努力が見れる一方、意味的には彼独自の思想が内在している。上記の詩は、誕生日は普通は新しい一年を思う祝日であるが、それは同時に過ぎ去った一年という時への痛切な愛惜の念を感じるというアッギューエの独特な思いを伝えようとしており、人生の真実を描こうとするものである。

更に、アッギューエの俳句的な短い詩は徐々に本格的な方向に向かっていく。1969年に出版された詩集の『サーガル・ムドラ、सागर-मुद्रा、海の通貨』の「ジヴァン・マルム、जीवन-मर्म、人生の秘密」という詩を取り上げたい。その詩は次のようである。

〈ヒンディー語〉 झरता पत्ता हरी डाल से अटक गया^⑦

〈読み〉 ジャルタ・パッタ ハリ・ダール・セ アタック・ゲヤ

〈訳〉 落葉は 緑の枝に 引っ掛かった。

「人生の秘密」という題の上記の詩はアッギューエによる俳句というべきものである。形式的に数えると、ヒンディー語の文字数は「5-5-5」となっており、形式的な俳句への接近を見てとることができる。

この詩は、嵐雪の辞世の句である「一葉散る 咄一葉散る 風の上」に描かれた死生観からの影響が明らかに見られる。アッギューエは詩を通して人生の秘密を語っているようである。木から落ちる葉は下に落ちなくて、枝に引っか

かってしまった。人間もこの世を去っていく事実を知っている。そして、生涯の終わりの時でも、この世に心をかけている。まるで落葉が木にかかっているようである。

ワルマ教授の出現

これまで、日本の文学は英語を主とする第三言語を介して、インドに紹介されていたが、サトヤ・ブシャン・ワルマ教授（1932年～2005年）は、インドで初めて日本語を直接ヒンディー語に翻訳し、日本語の魅力を伝えようとした人物であり、日本文学を研究する学者の中で、特に注目すべき人物である。

ワルマ教授は、日本とインドの言語に多大な貢献をしたことで知られている。インドのジャワハルラール・ネルー大学に初めて日本語学科を創設し、2003年に『ジャパニ・ヒンディー・コーシュ（原文：जापानी हिन्दी शब्दकोश、訳：日本語・ヒンディー語辞典）』を刊行した。この書は、インド人が日本語を習得する上で欠かせないものとなっている。

また、ワルマ教授は日本の詩歌をヒンディー語に翻訳し、1977年に『ジャパニ・カヴィターエ（原文：जापानी कवितायें、訳：日本の韻文集）』として出版した。154ページの本作は百人一首や俳句について、日本語の原文が載せられ、ヒンディー語で読み方と翻訳、作者名も記してあった。

154ページの本作では最初の42ページに解説として和歌、俳諧、俳句、川柳の説明と外国人によって翻訳された俳句の例などがまとめられ、その中の10ページ程を使って俳句の起源、方式、文字数、季語、切れ字などの説明がなされている。つづいて、作品紹介として103ページを用いて百人一首の和歌10首と俳句40句が載せられているが、俳句には漢字と平仮名の読みがヒンディー語で付記され、ヒンディー語の訳も掲載されている。最後の9ページは、詩の参照、作者名、アルファベット順に詩の一覧が載っている。

ワルマ教授は本作品で、日本の韻文の歴史をまとめながら、俳句について次のように述べている。俳句の源流は、室町時代に流行した、連歌の冒頭に置か

れる三句からなる「発句」である。芭蕉の登場によって、俳諧は極めて精神性の高い句風を確立し、文学性を押し上げた。芭蕉は禅に帰依し、句を作る時に意識を集中させる姿勢が、禅の瞑想から来ていると思われることから、俳諧には禅の影響が強く現れていると考えられる。

ワルマ教授は何人かの俳人の言葉を引用しながら、俳句の本質を次のように解説した。

- ・俳諧は単なる詩ではなく、大きな真実を指す示唆的な表現である。
- ・俳諧では言葉や感情表現を抑制する必要がある。
- ・俳諧は極めて繊細な感性を表現した文学である。
- ・句中には美意識や、感情、思想などが内在し、俳諧は人生の真実を描く方便である。

また、俳句の技法を説明して、文字数が五・七・五の三つの行からなる短詩であると同時に、季節も俳句と密接に関わっていることを明確にした。「季語」によって季節を表現できることから、伝統の中で様々な言葉が既に「季語」として定着していることを説明している。更に、本作の「切れ字」の説明として、「切れ字」とは日本の韻文において、文字数が制限されることから生まれたテクニックであるとしている。それは字自体にはあまり意味がないが、接尾語として用いられ、句の完成に重要な役割を果たすものである。

『ジャパニ・カヴィターエ』によって、インドの人々はこれまで以上に日本の俳句を正しく理解することができた。更に、ワルマ教授らの活動により、インドでは俳句を創作する人が増え、1970年頃には手紙^⑧を締め括る最後の言葉として、俳句を付け加えることが流行した。これは詩人たちだけでなく、学者や、教養ある読者層にまで、広く浸透したようである。

更に、彼は「インド俳句クラブ」を設立し、1981年にはインドで初めての俳句専門誌『ハイク（原文：हाइकु、訳：俳句）』を創刊した。同誌は1989年に廃刊されたが、インド人に俳句を浸透させるのに、多大な貢献を果たした。

これらの功績が日本でも認められ、ワルマ教授は1996年に旭日小綬章、

2002年には正岡子規国際俳句賞を与えられている。

ワルマ教授の俳句理解

ワルマ教授は「切れ字」などの表現も取り入れるために、翻訳にはヒンディー語の前置詞や感嘆符、助詞などを用いて工夫を試みている。例に『ジャパニ・カヴィターエ』から俳句を二句選んで、翻訳の方法を見てみよう。

〈ヒンディー語〉 पुष्प-गंध लुटाती उषा प्रकटी गिरि-पथ पर

〈読み〉 プスプ・ガンド・ロータティ・ウーシャ・パルカティ・ギーリー・
パート・パール

〈俳句〉 梅が香に のつと日の出る 山路かな (芭蕉)

第三句「山路かな」を「**गिरि-पथ पर** (読み：ギーリー・パート・パール)」と訳すが、「山路」が「**गिरि-पथ** (読み：ギーリー・パート)」、「かな」は「**पर** (読み：パール)」に当たる。「**पर**」は格助詞の働きをする助詞であり、途中で切ることによって詠嘆の意を表している。

〈ヒンディー語〉 कोकिल कुहुक्-कुहुक् उडती रे व्यस्त भाव से

〈読み〉 コキール・クホクークホク・ウドティ・レ・ベヤスト・バーヴ・セ

〈俳句〉 郭公 なくなく 飛ぶぞ いそがはし (芭蕉)

この俳句は第二句「なくなく飛ぶぞ」で切れている。ワルマ教授は「**कुहुक्-कुहुक् उडती रे** (読み：クホクークホク・ウドティ・レ)」と訳しているが、「なくなく」に擬声語「クホクークホク」、「飛ぶ」は動詞「ウドティ」、切れ字である「ぞ」にはヒンディー語で文章の末尾に使われる「レ」を用いて、句の断絶を表現している。

ワルマ教授は俳句の研究者でもあったので、「切れ字」のような俳句独自の表現まで翻訳しようとしたのである。その努力の結果、翻訳された三行の句がバランスを失い、意識になってしまったものさえもある。

ヒンディー語以外の詩人たち

インドはヒンディー語以外にも数多くの言語を有しており、詩人たちは日本の俳句をそれぞれの言語に翻訳し、自らも俳句に倣って短い詩を作っている。ここでは俳句と関わりのあるヒンディー語以外の詩人について、簡単に紹介しておく。

南インドのスブラマニア・バラティ（1882年～1921年）というタミル語を用いた詩人は日本の詩に興味を持ち、長編の俳句評論文も書いたと言われる^⑨。だが、当時はインドの独立運動が激しく、バラティも巻き込まれて、イギリス政府に拘束される恐れがあったため、地元のタミル・ナードゥ州から、当時フランスの植民地であったインドのポンディシェリ州に避難した。バラティは詩人以外に社会運動家としても活躍していたが、四十歳で夭逝しており、業績についての文献も乏しい^⑩。したがって本発表では、名前を挙げるのみに留めておく。

ニールマニ・フコン（1933年～）は、俳句をアサーミー語に翻訳し、『ジャパニ・カヴィタ（原文：जापानी कविता、訳：日本の詩）』の題で、1971年に俳句集を出版した。

プロバカル・マチュウエ教授（1917年～1991年）は日本を訪問した後、1960年に出版された『インドとアジア文学』で、俳句を紹介した。彼はヒンディー語とマラーティー語で何冊も著作を執筆し、俳句のヒンディー語訳も発表しているが、やはり日本語が読めなかったので、日本語から直接ヒンディー語に翻訳することはできなかった。

パンジャブ語の女流詩人、アムリタ・プリタム（1919年～2005年）は、『ナグマニ（原文：नागमणि、訳：宝石）』という文学雑誌の中で、俳句をパンジャブ語に翻訳した。

これらの詩は必ずしも、五・七・五の形式を守ったものではないが、詩人たちはそれらを全て「俳句」と称していた。しかし、彼らがインドにおける俳句の享受に影響することはほとんどなかったようである。

インドの詩人たちによって紹介された代表的な俳人として、荒木田守武、松尾芭蕉、服部嵐雪、小西来山、上島鬼貫、宝井其角、野沢凡兆、与謝蕪村、大島蓼太、高桑蘭更、小林一茶、正岡子規、大谷句仙などの名前が挙げられる。インドで行われた俳句の翻訳は、内容に忠実で、簡潔さを留め、なるべく元の俳句に近づけようとする姿勢が伺える。

現代インドにおける俳句研究

現在、インドにおいて日本文化・文学を研究している主な機関としては、ネルー大学とデリー大学がある。しかし、日本文学が専門の研究者は数える程しかおらず、韻文の研究者になるといっそう限られる。その中で、デリー大学のウニタ・サチダナンド教授（1959年～）は、日本の詩歌をヒンディー語に訳し、日本の文化・文学研究に取り組んでいる。

また、言語の壁を越え、日本とインドを俳句で繋ごうと活動する者たちもいる。ワルマ教授によって1978年～1987年まで出版し続けた「俳句パトラ」は廃止されたが、他の学者や教授は印象を受け、俳句の雑誌を出版し始めた。

例えば、1981年～1989年まで「ハイク」という雑誌がカムレシュ・バット・カマル氏とラムニワス・パンティ氏によって出版されていた。一方、インド大学のバグワト・サラヌ・アガルワール教授（1930年～）は俳句に深い愛着を持ち、1998年から季刊誌『ハイク・バラティ（原文：हाइकु भारती、訳：インドからの俳句）』を、詩人たちの協力を受けつつ、今日に至るまで刊行し続けている。そして、2004年からジャグディース・ワヨム氏は俳句専門誌の『ハイク・ダルパン（原文：हाइकु दर्पण、訳：俳句の鏡）』を不定期に出版されている。

インドにおける俳句愛好の一例として、バグワト教授が作った俳句をここで紹介したいと思う。

〈ヒンディー語〉 मर जाऊंगा यकीन नहीं होता फिर क्या होगा

〈読み〉 マル・ジャウンガ・ヤキン・ナヒ・ホタ・フィル・キャ・ホーガ

〈逐語訳〉 死んじゃうのか 信じられない その後は

時間の流れに沿っていくと、タゴールが初めてインドへもたらした日本の俳句は、アッギューエの翻訳によって広く知られるようになり、更にワルマ教授が著した『ジャパニ・カヴィターエ』は、初めて日本語からヒンディー語へ直接翻訳され、日本の俳句に対する理解は深まった。

日本の俳句は、タゴール、アッギューエ、ワルマ教授らを通して、日本を代表する文化として、インドで認識されるようになった。俳句の他にも和歌、茶道、生け花などが紹介されたが、あくまで一時的な流行に過ぎず、俳句のように長く受け入れられることはなかった。しかも、広い地域と多言語で構成されたインドでは、今もなお教育の普及に多くの課題があり、日本の文化について研究できるのは、ある程度の知識層に限られているのが現状である。

近年、日印間は政治や経済において、ますます緊密な関係になっており、日本の文化に対する関心も、より高まっていくことが予想される。インドにも日本にも韻文学を頂点とする長い文学の伝統があり、俳句はインドの人々にとって、最も親しみやすい日本文学の一つとなっていく可能性があるとは私は信じている。

[注]

- ①プラット・アブラハム・ジョージ (P.A.George) 「インドにおける日本研究の現状——問題と将来性——」『立命館言語文化研究』21巻3号、2010年1月
- ②テ戈尔, “जापान यात्री”, विश्व भारती प्रकाशन, 1919
- ③अज्ञेय “अरी ओ करुणा प्रभामय” भारतीय ज्ञानपीठ, नयी दिल्ली, 2006, पेज 78
- ④『インドに於ける俳句』、サトヤ・ピ・ワルマ、第33回日文研フォーラム、ページ24~25
- ⑤宮森氏を引用する理由は上記に述べたようにアッギューエはこの本の英語訳を読んだ可能性があるからである。
- ⑥अज्ञेय “अरी ओ करुणा प्रभामय” भारतीय ज्ञानपीठ, नयी दिल्ली, 2006, पेज 134
- ⑦अज्ञेय “सागर-मुद्रा” जीवन-मर्म, राजपाल एण्ड सन्ज, दिल्ली, 1970
- ⑧ネール大学の講義において、稿者がワルマ教授から直接伺った。
- ⑨Dr. Angelee Deodhar, ‘Haiku: An Indian Perspective’ Haiku International Association Article, 2013
- ⑩रा. अ. पद्मनाभन्सु “ब्रह्मण्यम् भारती” अनुवाद, सुमति अय्यर, नेशनल बुक ट्रस्ट, इंडिया, नई दिल्ली, 1987

* 討議要旨

初めに司会の伊藤鉄也氏が、ここ 10 年ほど毎年インドを訪れており、昨年は、東日本大震災に関してインドの方々から詠んだ俳句と短歌を収めた冊子を託されたことを紹介した。伊藤氏は「俳句・短歌が生きている国だ」という実感を抱き、そのつながりにおいて本発表を理解したと述べた。

湯沼誠二氏は、インドの俳句享受についての詳しい研究発表は大変興味深く、とりわけワルマ教授の功績が高く評価されるものと思われるが、来日経験や日本への留学があったのかと、質問した。発表者は、ワルマ教授がヒンディー学科で学んだ後、奨学金を得て日本に留学し、日本語・日本文学を学んだこと、その経験を生かしてインドで初めて設置された日本学科（ネール大学）で教鞭を執ったことを説明した。更に、同教授がヒンディー語・日本語辞典を編纂し、詩を好むインドの人々に向けて新鮮なかたちの詩、日本の韻文集として俳句の本を出版した業績についても、発表者は説明した。司会の伊藤鉄也氏からも、2004 年に亡くなったワルマ教授がインドにおける日本文学研究のスタート地点を作られた方であり、日本を深く愛しておられたこと、生前、ヒンディー語・日本語辞典を贈られ、お話を伺うなど、交流を重ねてきたことの説明があった。

目野由希氏は、発表の中で取り上げられた A・ミヤモリ氏の書物についての詳細説明とインドの言語についての 1919 年以前の時系列的な説明の 2 点を求めた。後者の問題に関して目野氏は、ヒンドゥスターニー語がヒンディー語に分化していく過程において、1919 年より前にヒンディー語の方がスタンダードであったとは考えられず、今回の発表のようにヒンディー語に訳されたことを中心に考えて問題設定を行うことが歴史的経緯と齟齬を生じる可能性があること、そして知識層が英語を使用していた事実を考慮する必要性があることにも言及した。第 1 点目について発表者は、A・ミヤモリ氏の翻訳を、逐語訳でないかたちで俳句風な翻訳が行われている事例として取り上げたことを説明した。また第 2 点目について、イギリス統治時代は、ペルシア語やウルドゥー語が公用語となったが、ウルドゥー語も、詩が多く作られている言語であった。1947 年からインドはヒンディー語を連邦公用語とし、1957 年から日印外交が本格的に始まった。ヒンディー語が連邦公用語となる以前には、ベンガル語もあまり使用されず、話し言葉としては、ヒンディー語と文字だけがヒンディー語と異なるウルドゥー語に限られた地域で用いられていたことを、発表者は説明した。